

ひきこもりに関する調査結果

令和3年1月14日 山梨県福祉保健部

1 調査の目的及び手法

ひきこもりの背景や要因は多様であることや、ひきこもり当事者の生活を支えてきた親も高齢となり、病気や要介護状態をきっかけに一家が生活困窮に陥り社会的に孤立する、いわゆる「8050問題」の視点も加え、社会全体での多面的・総合的なアプローチが必要となっていると考えられることから、今後のひきこもり当事者や家族への支援につなげるための基礎資料とすることを目的として、本調査を実施することとした。

調査の手法は、平成27年度と同様に、山梨県民生委員児童委員協議会及び市町村民生委員児童委員協議会の御協力を得て、民生委員・児童委員の皆様が把握されている担当地区の情報（個別訪問や関係先等への照会を行わない）を調査票に記入してもらう形とした。

2 実施主体

山梨県及び市町村

3 調査対象

この調査では、概ね15歳以上で、次に該当する者を「ひきこもりの状態にある者」とした。

- (1) 社会的参加（仕事・学校・家庭以外の人との交流など）ができない状態が6か月以上続いていて、自宅にひきこもっている状態の者
- (2) 社会的参加ができない状態が6か月以上続いているが、時々買い物などで外出することがある者

※ただし、重度の障害、疾病、高齢等で外出できない者を除く。

4 調査基準

令和2年9月現在

5 調査方法

県内の民生委員・児童委員が、担当地区における、ひきこもり当事者等の情報を調査票に記入し、市町村が調査票の配付及び取りまとめを行い、県は集計・分析を行った。

6 調査票の回収数（回収率）

民生委員・児童委員2,282人に配付し、1,928人（84.5%）から回収

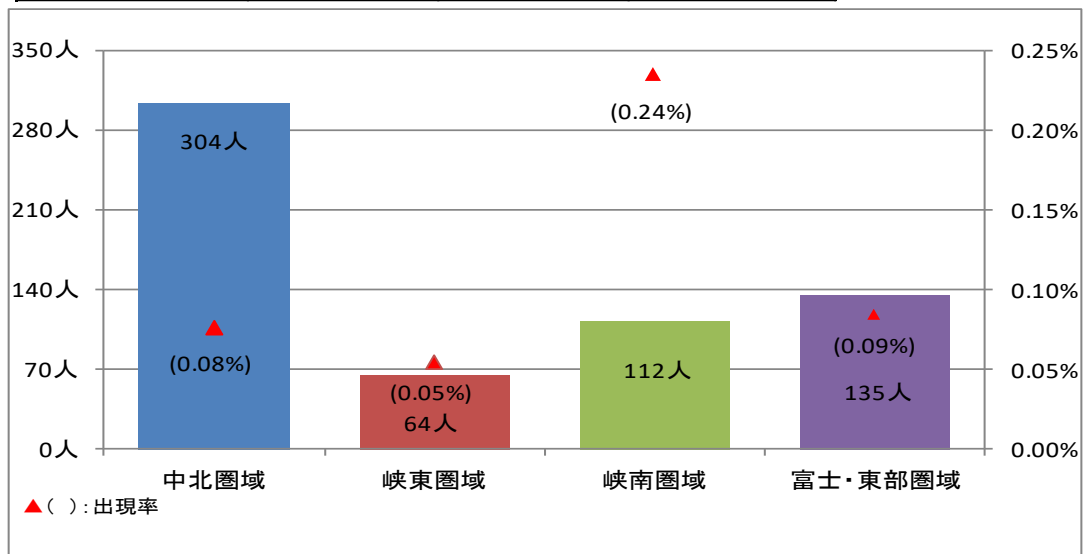
7 調査結果

(1) 該当者数

○本調査により把握できた該当者数は、615人。人口当たりの該当者の割合（出現率）は0.09%となっている。

○アンケート全数の回答があったものとして、上記の出現率により推計すると、該当者数は728人となる。

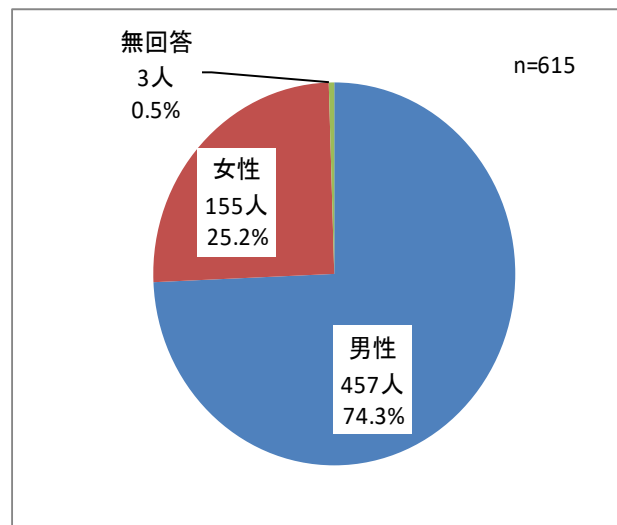
圏域	該当者数	15歳以上人口(A)	15歳以上人口に占める割合
中北圏域	304人	399,202人	0.08%
峡東圏域	64人	118,067人	0.05%
峡南圏域	112人	47,609人	0.24%
富士・東部圏域	135人	158,511人	0.09%
合計	615人	723,389人	0.09%



(2) 該当者の性別

○該当者の性別は、男性が74.3%、女性が25.2%となっており、男性が全体の3/4ほどを占めている。

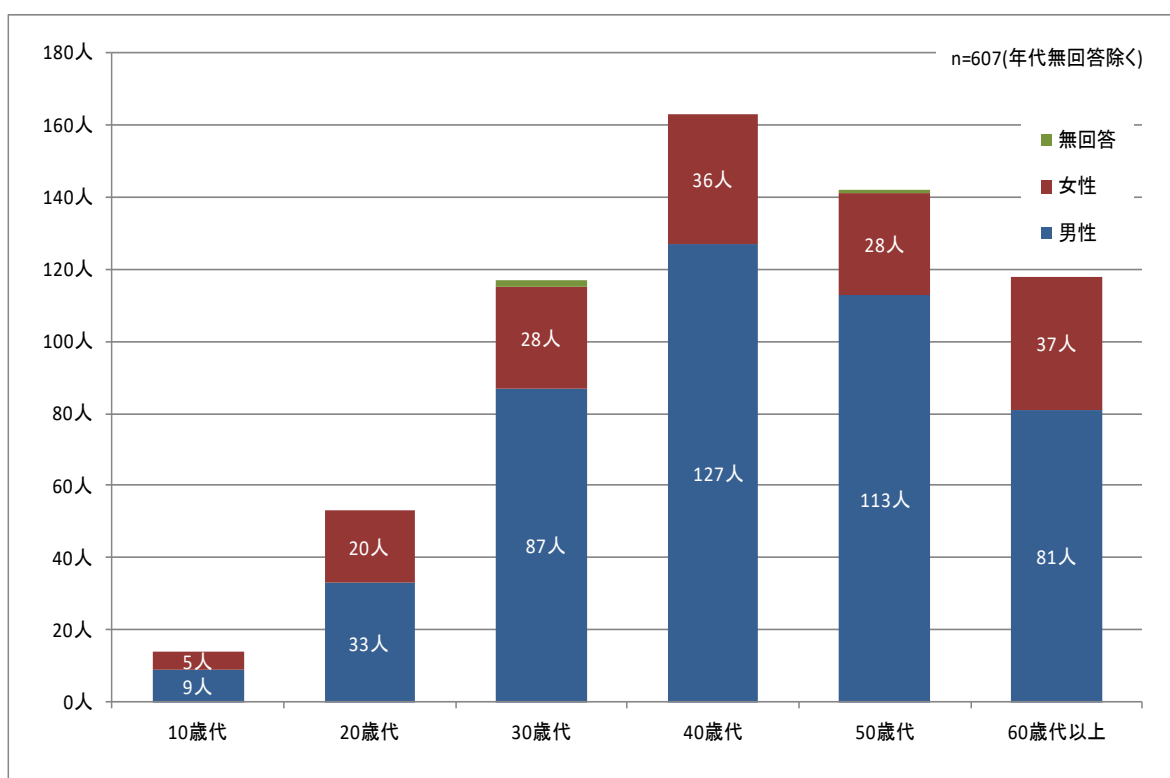
性別	該当者数	割合
男性	457人	74.3%
女性	155人	25.2%
無回答	3人	0.5%
合計	615人	100.0%



(3) 該当者の年代別性別状況

- 該当者は、40歳代が最も多く、次いで、50歳代、60歳代以上となっている。
- 40歳代以上が423人と全体の約7割を占めている。
- 男性は、40歳代が最も多く、次いで50歳代、30歳代の順となっている。
- 女性は、60歳代以上が最も多く、次いで40歳代、30歳代と50歳代が同数となっている。

年代	男性	女性	小計	無回答	合計	年代別割合 (年代無回答除く)	「40歳未満」 「40歳以上」 (年代無回答除く)	「40歳未満」 「40歳以上」 割合(年代無回答除く)	年代別 出現率
10歳代	9人	5人	14人	0人	14人	2.3%	184人	30.3%	0.03%
20歳代	33人	20人	53人	0人	53人	8.7%			0.07%
30歳代	87人	28人	115人	2人	117人	19.3%			0.13%
40歳代	127人	36人	163人	0人	163人	26.9%			0.14%
50歳代	113人	28人	141人	1人	142人	23.4%	423人	69.7%	0.13%
60歳代以上	81人	37人	118人	0人	118人	19.4%			0.04%
小計	450人	154人	604人	3人	607人				
無回答	7人	1人	8人	0人	8人				
合計	457人	155人	612人	3人	615人		607人		0.09%

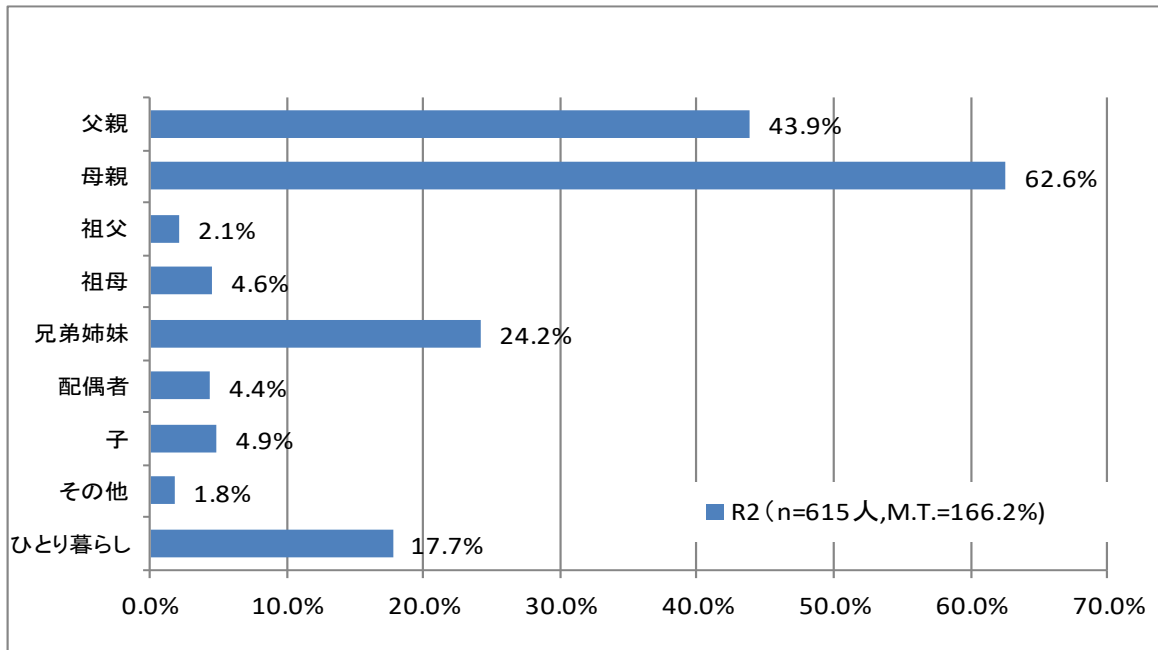


(4) 家族構成 (複数回答可)

① 全体

○同居人としては、母が62.6% (該当者615人に占める割合) と最も多く、次いで父、兄弟姉妹となっている。

○一方で、ひとり暮らしが、17.7%となっている。



② 年代別

○50歳代までは、父親、母親との同居が多い。

○40歳代以上は、年代が上がるごとにひとり暮らしの割合が高くなっており、60歳代以上は、ひとり暮らしが最も多い。

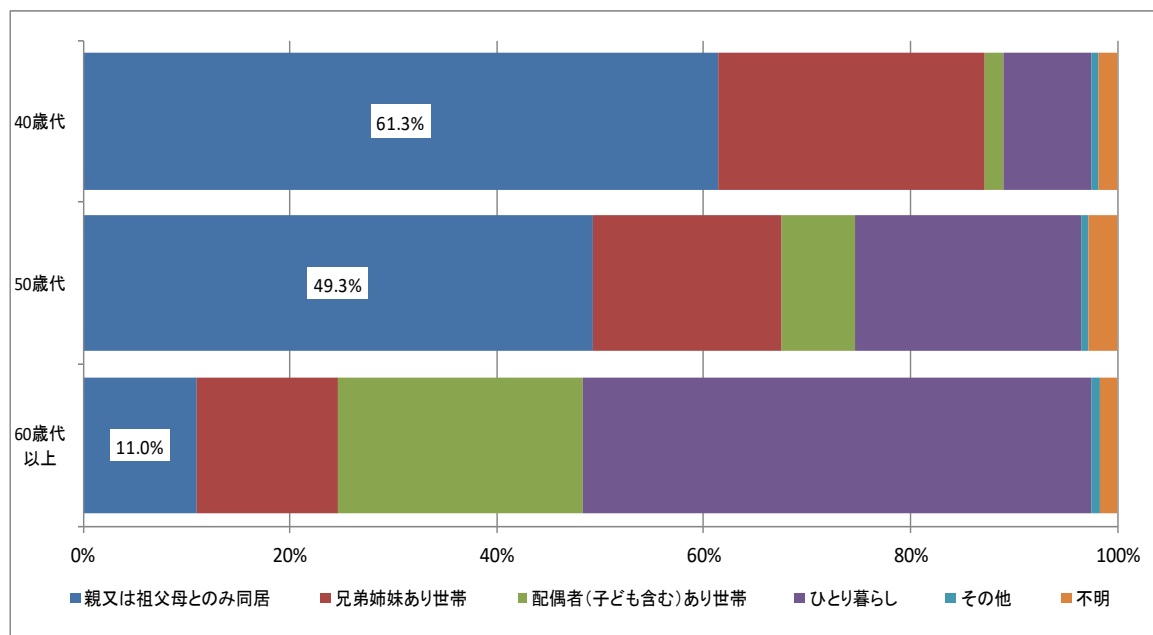
年代	父親	母親	祖父	祖母	兄弟姉妹	配偶者	子	その他	ひとり暮らし
10歳代	8人	13人	3人	5人	9人	0人	0人	1人	0人
20歳代	37人	42人	6人	10人	17人	1人	0人	1人	3人
30歳代	90人	101人	4人	10人	38人	1人	2人	4人	2人
40歳代	98人	129人	0人	2人	42人	1人	3人	2人	14人
50歳代	31人	81人	0人	0人	26人	7人	6人	2人	31人
60歳代	3人	15人	0人	1人	17人	16人	19人	1人	58人
無回答	3人	4人	0人	0人	0人	1人	0人	0人	1人



③ 40歳代以上

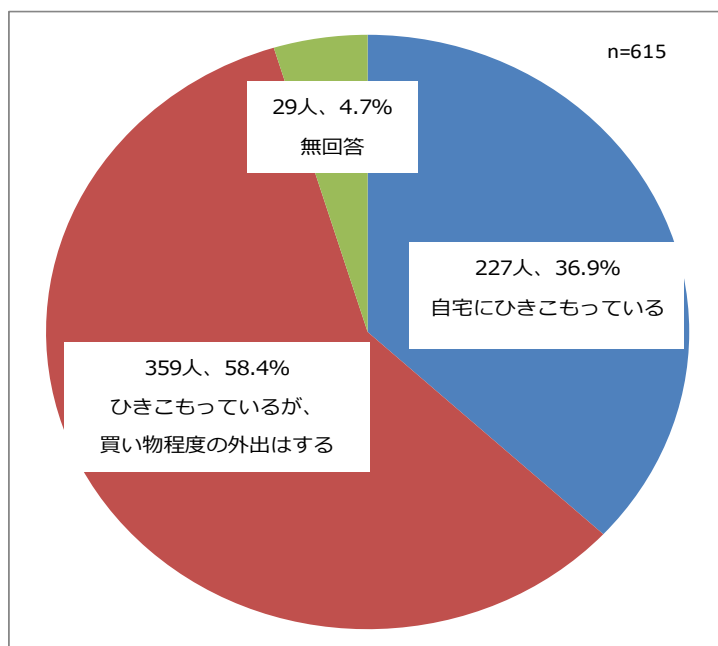
○40歳代、50歳代の約半数が「親又は祖父母とのみ同居」しており、当事者の生活を支える親などの高齢化により、社会的に孤立する8050問題（7040問題）に陥る可能性の高い世帯が相当数あることが窺われる。

年代	親又は祖父母とのみ同居	兄弟姉妹あり世帯	配偶者(子ども含む)あり世帯	ひとり暮らし	その他	不明	合計
40歳代	100人	42人	3人	14人	1人	3人	163人
50歳代	70人	26人	10人	31人	1人	4人	142人
60歳代	13人	16人	28人	58人	1人	2人	118人
合計	183人	84人	41人	103人	3人	9人	423人



(5) 該当者の状況

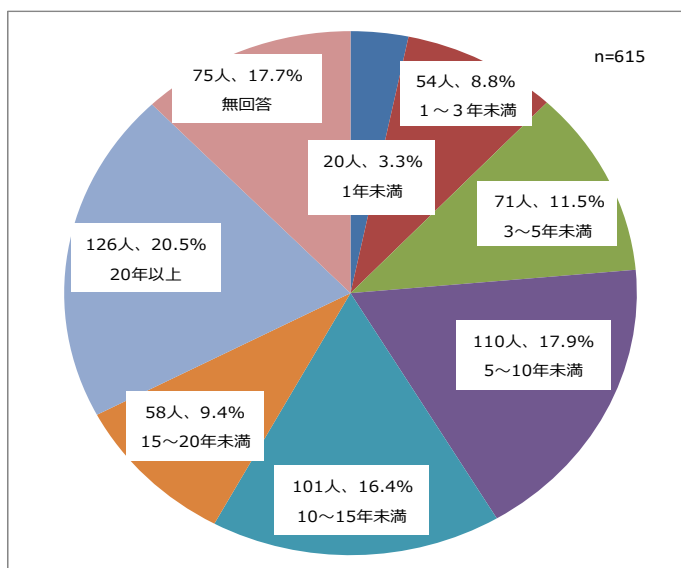
○「自宅にひきこもっている人」が36.9%、「ひきこもっているが、買い物程度の外出はする」が58.4%であった。



(6) ひきこもりの状態にある期間

① 全体

○ひきこもりの状態にある期間「10年以上」の者が、全体の46.3%を占め、「20年以上」の者は、全体の20.5%と多かった。

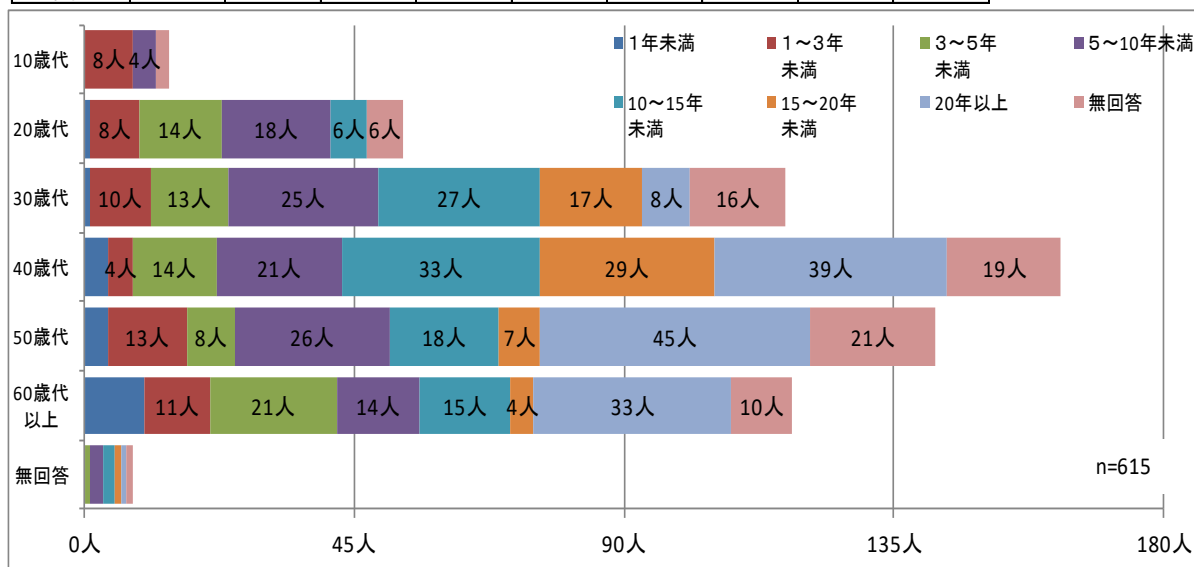


② 年代別

○ひきこもりの状態にある期間を年代別にみると、最も多いのは、10歳代では「1～3年未満」、20歳代では「5～10年未満」、30歳代では「10～15年未満」、40歳代以降では、「20年以上」が最も多くなっており、特に、50歳代では3割以上が20年以上ひきこもりの状態にある。

○このことから、ひきこもりとなる年齢は、10歳代後半～20歳代が多いことが窺われる。

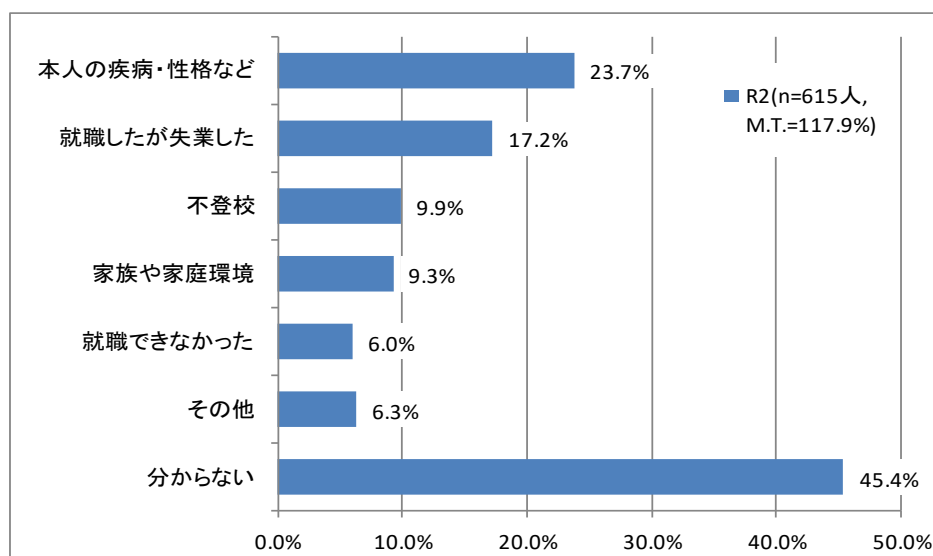
年代	1年未満	1～3年未満	3～5年未満	5～10年未満	10～15年未満	15～20年未満	20年以上	無回答	合計
10歳代	0人	8人	0人	4人	0人	0人	0人	2人	14人
20歳代	1人	8人	14人	18人	6人	0人	0人	6人	53人
30歳代	1人	10人	13人	25人	27人	17人	8人	16人	117人
40歳代	4人	4人	14人	21人	33人	29人	39人	19人	163人
50歳代	4人	13人	8人	26人	18人	7人	45人	21人	142人
60歳代以上	10人	11人	21人	14人	15人	4人	33人	10人	118人
無回答	0人	0人	1人	2人	2人	1人	1人	1人	8人
合計	20人	54人	71人	110人	101人	58人	126人	75人	615人



(7) ひきこもりに至った経緯（複数回答）

① 全体

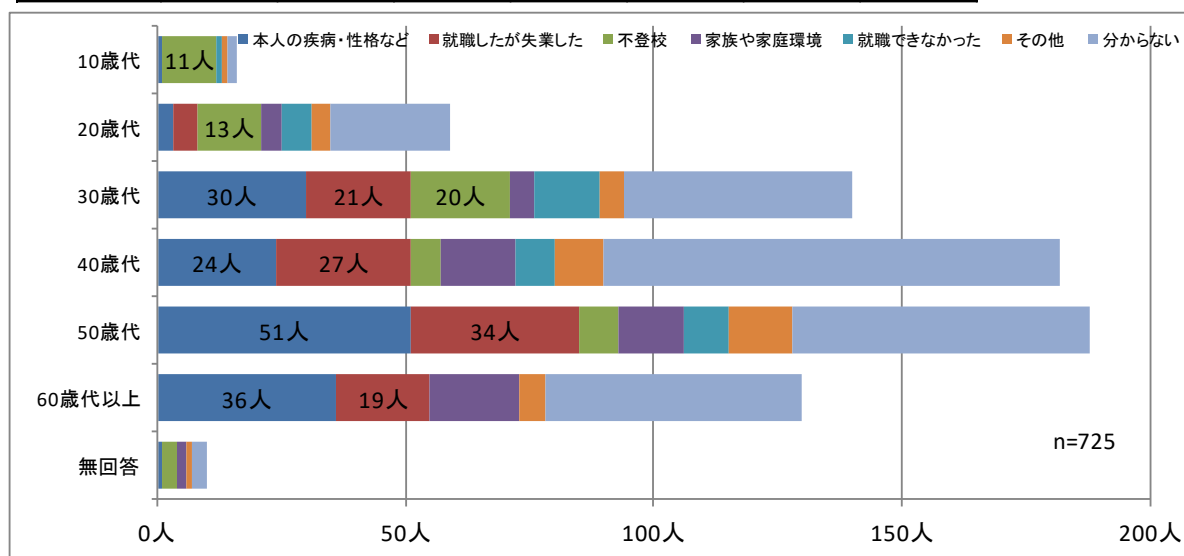
- 「分からない」が最も多く、全体の45.4%（該当者数615人に占める割合）を占めており、実態把握の難しさを示していると考えられる。
- 続いて、「本人の疾病・性格など」、「就職したが失業した」、「不登校」の順となっている。



② 年代別

- 年代別では、10歳代、20歳代では「不登校」が最も多く、30歳代以上では、「本人の疾病・性格など」、「就職したが失業した」が多かった。
- 「本人の疾病・性格など」は、50歳代、60歳代の順に多く、「失業」は、50歳代、40代の順に多かった。

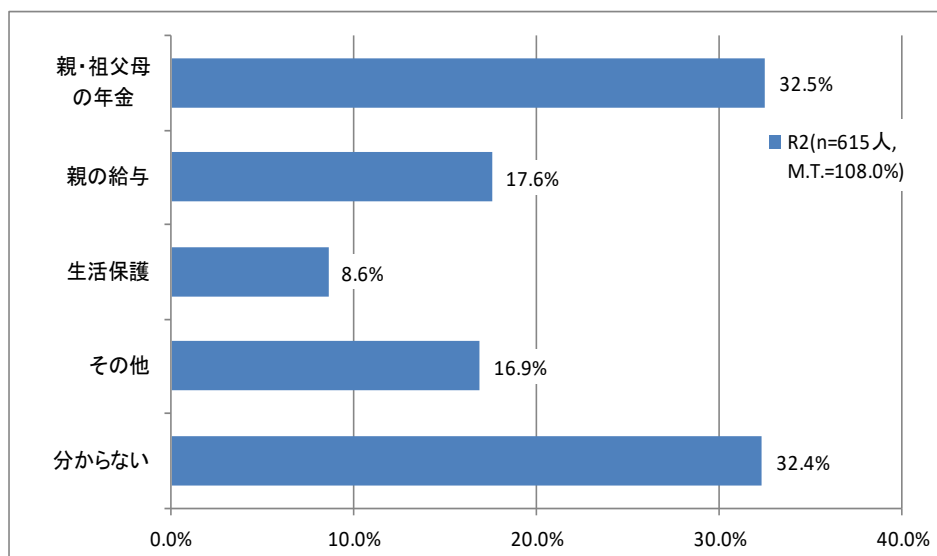
年代	本人の疾病・性格など	就職したが失業した	不登校	家族や家庭環境	就職できなかった	その他	分からない
10歳代	1人	0人	11人	0人	1人	1人	2人
20歳代	3人	5人	13人	4人	6人	4人	24人
30歳代	30人	21人	20人	5人	13人	5人	46人
40歳代	24人	27人	6人	15人	8人	10人	92人
50歳代	51人	34人	8人	13人	9人	13人	60人
60歳代以上	36人	19人	0人	18人	0人	5人	52人
無回答	1人	0人	3人	2人	0人	1人	3人
総計	146人	106人	61人	57人	37人	39人	279人



(8) ひきこもり該当者のいる家庭の主な収入状況（複数回答）

① 全体

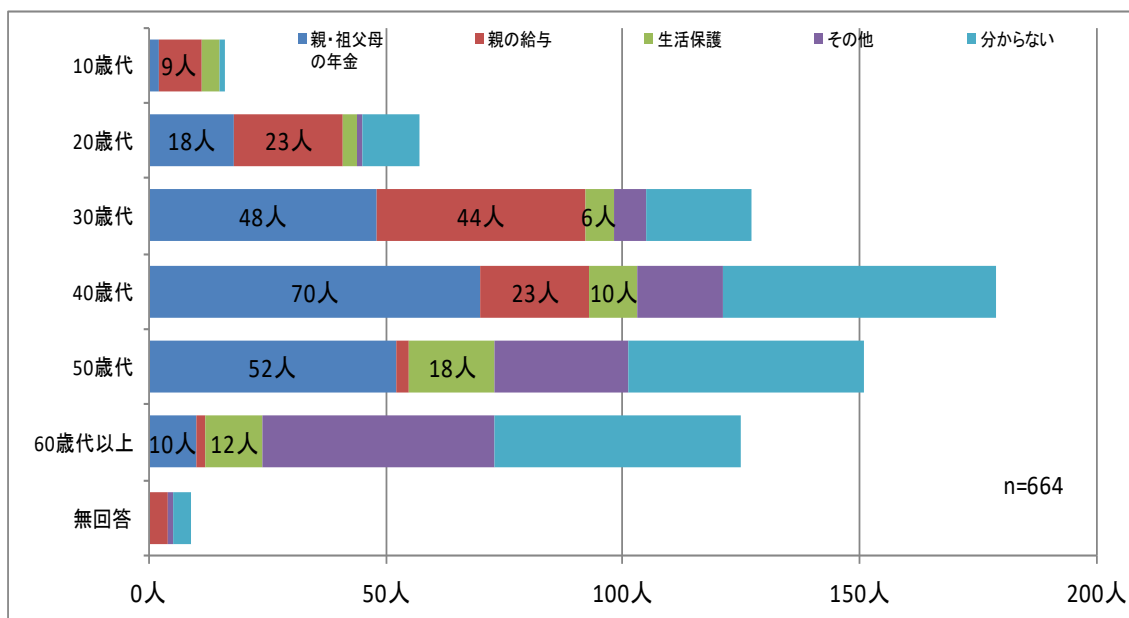
- 「親・祖父母の年金」（32.5%）が最も多く、次いで、「親の給与」（17.6%）、の順になっている。
- また、「分からない」との回答も32.4%と多い。



② 年代別

- 30歳代～50歳代では、「親・祖父母の年金」が主な収入となっており、当事者の生活を支える親などの高齢化により、社会的に孤立する8050問題（7040問題）に陥る可能性が高いことが窺われる。

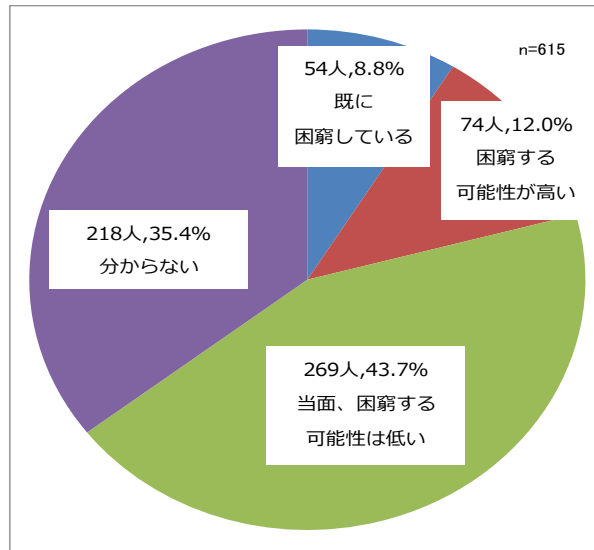
年代	親・祖父母の年金	親の給与	生活保護	その他	分からない
10歳代	2人	9人	4人	0人	1人
20歳代	18人	23人	3人	1人	12人
30歳代	48人	44人	6人	7人	22人
40歳代	70人	23人	10人	18人	58人
50歳代	52人	3人	18人	28人	50人
60歳代以上	10人	2人	12人	49人	52人
無回答	0人	4人	0人	1人	4人



(9) 生活困窮の可能性

① 全体

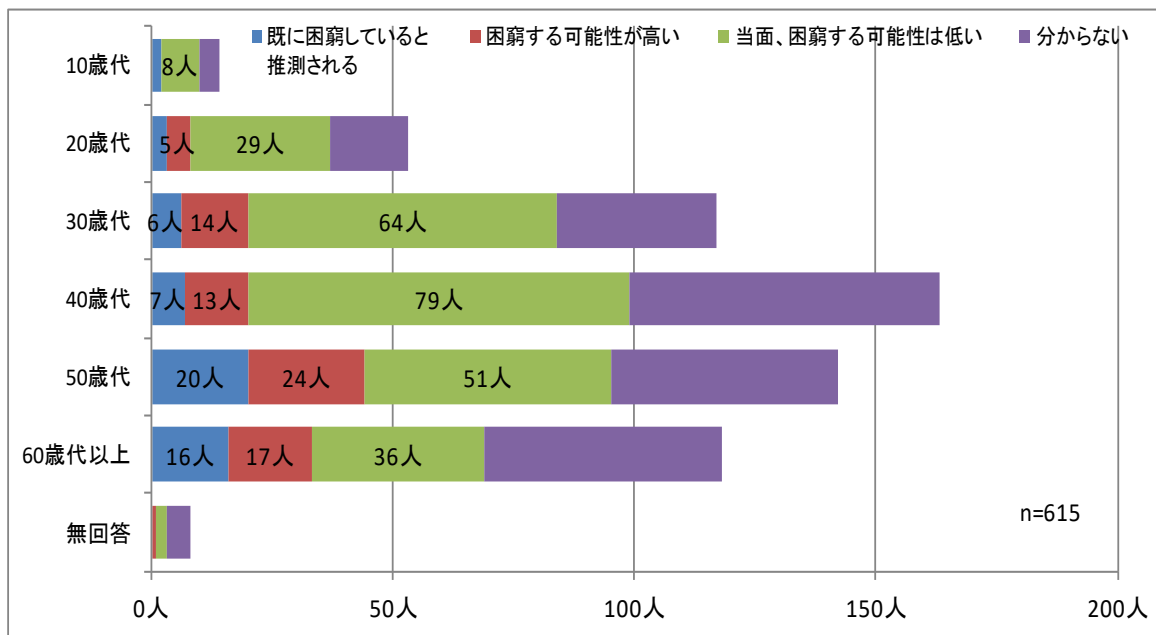
- 「当面、困窮する可能性は低い」が269人と最も多く全体の43.7%を占めており、次いで「分からない」が218人(35.4%)となっている。
- 「困窮する可能性が高い」が74人(12.0%)、「既に困窮している」が54人(8.8%)となっている。



② 年代別

- 年代別に見ると、50歳代以上では、「既に困窮していると推測される」が36人(13.8%)、「困窮する可能性が高い」が41人(15.8%)となっている。

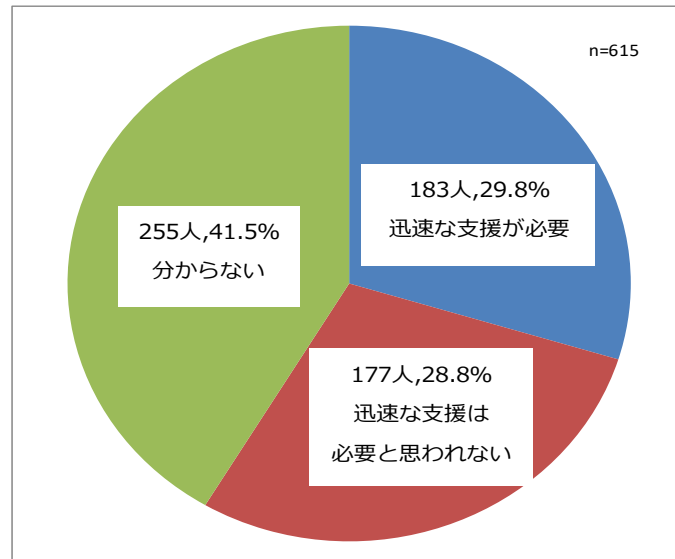
年代	既に困窮していると推測される	困窮する可能性が高い	当面、困窮する可能性は低い	分からない	合計
10歳代	2人	0人	8人	4人	14人
20歳代	3人	5人	29人	16人	53人
30歳代	6人	14人	64人	33人	117人
40歳代	7人	13人	79人	64人	163人
50歳代	20人	24人	51人	47人	142人
60歳代以上	16人	17人	36人	49人	118人
無回答	0人	1人	2人	5人	8人
総計	54人	74人	269人	218人	615人



(10) 今後の支援の必要性

① 全体

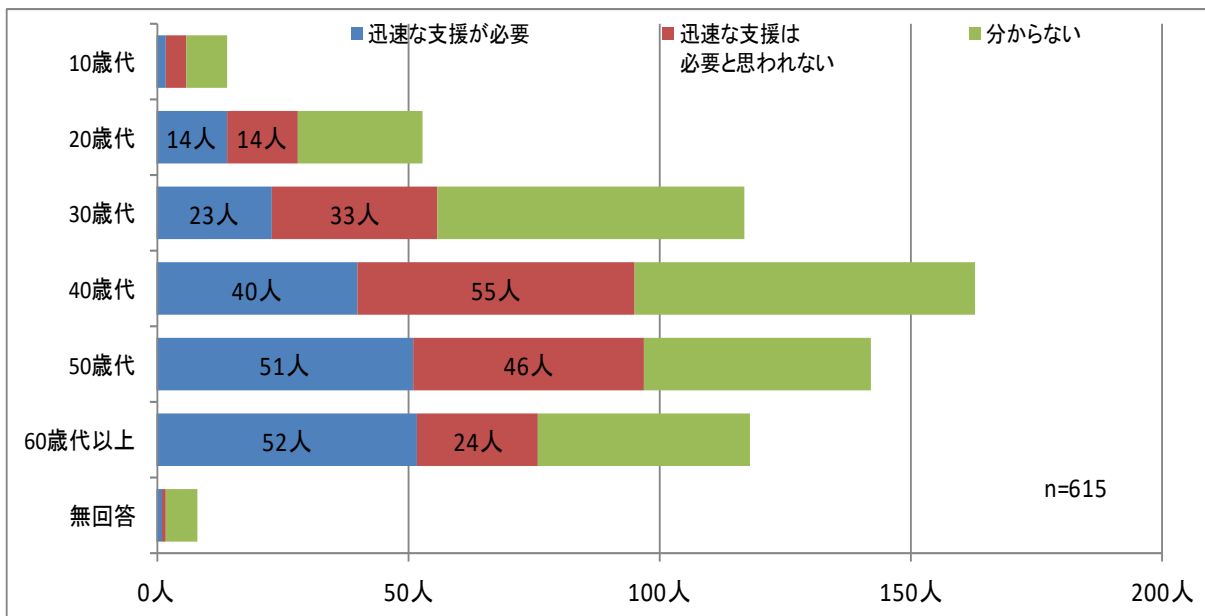
- 「分からない」が255人（全体の41.5%）と最も多く、実態把握の難しさを示していると考えられる。
- 「迅速な支援が必要」と「迅速な支援が必要と思われない」の割合は同程度だった。



② 年代別

- 「迅速な支援が必要」が183人。このうち、40歳代以上が143人（78.1%）となっている。

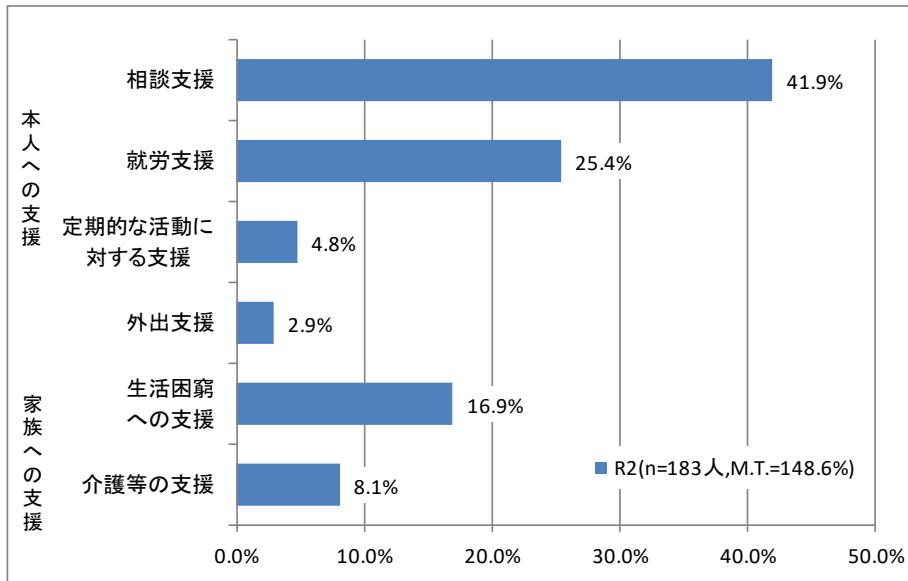
年代	迅速な支援が必要	迅速な支援は必要と思われない	分からない	合計
10歳代	2人	4人	8人	14人
20歳代	14人	14人	25人	53人
30歳代	23人	33人	61人	117人
40歳代	40人	55人	68人	163人
50歳代	51人	46人	45人	142人
60歳代以上	52人	24人	42人	118人
無回答	1人	1人	6人	8人
総計	183人	177人	255人	615人



③ 必要な支援の内訳（複数回答）

ア 全体

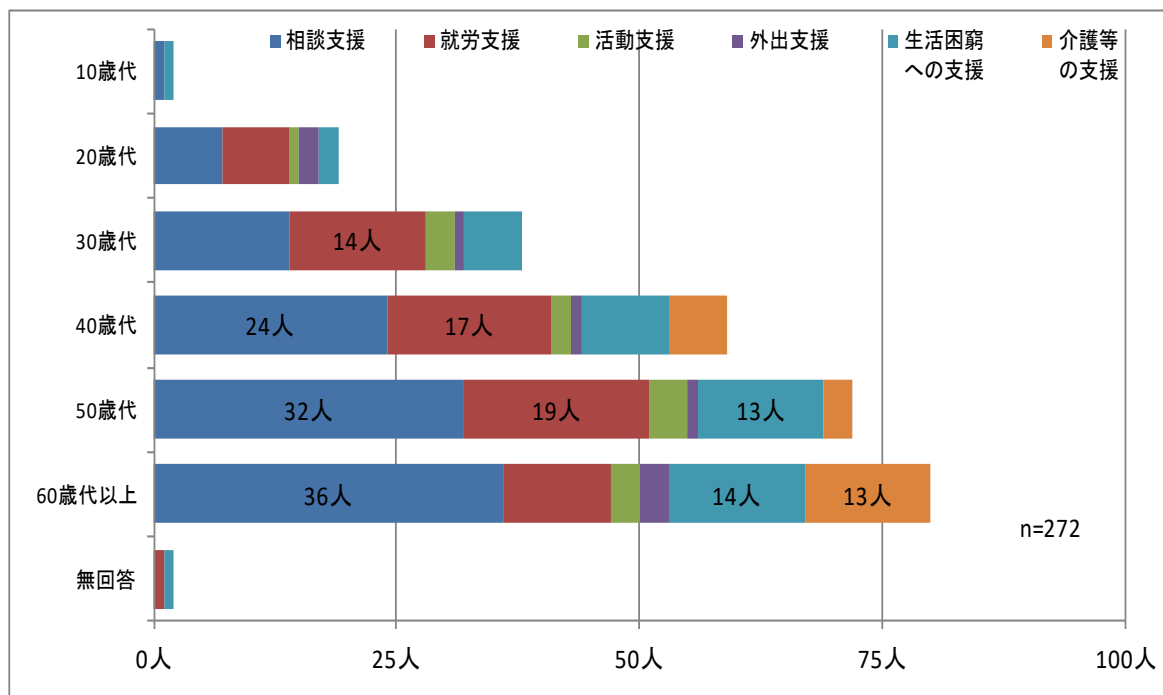
○本人への支援は、「相談支援」が全体の41.9%を占め、最も多く、次いで、「就労支援」が25.4%と多かった。



イ 年代別

○年代が上がるにつれ、本人、家族双方への支援が求められていることが窺われる。

年代	本人への支援				家族への支援	
	相談支援	就労支援	活動支援	外出支援	生活困窮への支援	介護等の支援
10歳代	1人	0人	0人	0人	1人	0人
20歳代	7人	7人	1人	2人	2人	0人
30歳代	14人	14人	3人	1人	6人	0人
40歳代	24人	17人	2人	1人	9人	6人
50歳代	32人	19人	4人	1人	13人	3人
60歳代以上	36人	11人	3人	3人	14人	13人
無回答	0人	1人	0人	0人	1人	0人
総計	114人	69人	13人	8人	46人	22人



(11) 自由意見から

【調査の困難さ】

- ・ひきこもり、不就労などについては家族が情報開示しない限り、分からない部分が多く、はっきりしないのが現状。
- ・デリケートな問題で難しい。家の中での仕事（デイトレーダー、イラストレーター、文筆家等）をしている可能性もある。暴力などで警察沙汰にならない限り、潜在的なひきこもりの把握は難しい。
- ・調査の内容については民生委員でも把握していない。把握できない内容も多い。
- ・自治会の役員の方が詳しいと思うが、近年は自治会未加入者もいるとのこと。
- ・世帯票などから推測は出来るが、直接の確認は御家族からの拒否も予想され、実態把握の難しさを感じる。
- ・世帯へ声をかけづらい。御家族も隠しておきたいと思う。

【ひきこもりに対する認識】

- ・社会問題化して久しいが、地方の小さなコミュニティにおいては、家族、親族等が公にしたいくない気持ちが強いため、実態が掴めず難しい問題。
- ・本人にしてみれば必ずしも辛かったり不自由だったりする訳でなく、自由に暮らしていると考えれば無理やり社会に出なくてもよいのではないかと思ってしまう。どういう支援が必要なのか社会通念だけで考えなくてもよいと思う。生き生きとその人らしく生きられる支援をしてあげられたらと思った。
- ・当事者も隠れている訳ではなく、相談支援を受けられることの気づきがないと思う。
- ・ひきこもり期間が長くなると、近所の人も声をかけづらくなり、御家族も黙ってしまう傾向にある。皆がどうすれば良いのか悩み、解決策も見つからないまま経過しているのではないだろうか。
- ・若年層、特に子どものひきこもり対応は、将来に向けて大変重要な社会全体のテーマと考えられる。

【家族の状況】

- ・御家族は心配しているが、本人の生活を無理矢理変えることには強い不安感があり、現在に至っているようだ。
- ・高齢の母親が当事者のために家事全般を担っており、大変な生活をしている方もいる。状況を誰にも伝えられず、母がひとりで困っている。
- ・親が困っていないため、支援者に関わってもらいたくない様子。
- ・過去に担当保健師が訪問した際に、両親が特に支援を希望しなかったと聞いた。

【今後の希望】

- ・ひきこもりに関する講習会を開催して欲しい。
- ・多様性を理解できる社会であって欲しい。民生委員として対応方法を学びたい。
- ・集いや就労支援等定期的な活動の場や人と交流する機会、外との支援が必要と思う。
- ・身近に相談できる窓口等を周知し、気軽に相談できる環境を整えることが望ましい。
- ・早期からの相談支援等が大切だと思う。
- ・御家族が相談しやすいように相談体制の工夫があればと思う。家族教室や家族の相談窓口が身近にあると良いと思う。
- ・御家族の精神的な不安・負担についても支援をお願いしたい。
- ・実態把握をベースとして、その対応策の計画立案、実施、検証、評価、再構築といった一連のスキーム確立（実施）のための専門実行委員会等の組織体（行政内）の仕組みが必要と考える。